参加者一覧 …… 02
連作欄 8首の連作 自由詠 …… 03
テーマ詠欄 「休」 …… 12
一首評 「そらよみ」 …… 15
短歌リレーコラム 「望遠鏡」 …… 16
クロスワード …… 17
リレーエッセイ 「いちごいちえ」 …… 18
次回予告・編集後記 …… 19

うたそら

Utasora

2025. May

No. 26

うたそら　第２６号
発行：2025.05.01
編集・制作：千原こはぎ
@kohagi_tw　http://kohagiuta.com/utasora/

うたそら

ご参加いただいたみなさん（五十音順）

2025. May No. 26

麻数	@umberhemp
麻倉ゆえ	@AsakuraYue
雨声	@amagoe931854
井倉りつ	@uta_litz
今紺しだ	@imaconsida
宇井モナミ	@kijousan
宇祖田都子	@shinsyutu2020
泳二	@Ejshimada
hs	@hswelt
歌島孟	@Sinn1990
神洲橋	@kamisubash33489
涸れ井戸	@kaionjijoe
河岸景都	@kate_kawagishi
川瀬十萠子	@nagikawase
北谷雪	@kitaya_misomiso
橘高なつめ	@coconutkikko
香子	@kyoko_shogi
久保田毒虫	@dokumu44
くろだたけし	@tkuro2016
桜さくら	@wJS9f8NwfuJlVq3
鹿ヶ谷街庵	@ikasamabakuchi
西鎮	@xi_zhen_ivUT
寿司村マイク	@xHksbNR4wv1wj8M
砂山ふうり	@_nrkmnm
たえなかすず	@suzusuzu2009
多香子	
千原こはぎ	@kohagi_tw
天祐　実	@bwoojin
中村成志	@nakam8
袴田朱夏	@hakamada_shuka
畑　依裕	
薄荷。	@aie0himeco
廣珍堂	@Hirochin_dos
福山桃歌	@momoka_fukuyama
古井　朔	@saku_furui
真岡まな	@mao_or_mana
まつさかゆう	@_yuumatsu
御糸さち	@MEATsachi
南の島	@_nrkmnm
水せ	@m_iya_o
宮岡 りょう	@myao_rrr
虫武一俊	@mushitake
六厩めれう	@mereumumai
村田一広	@mucci2022
森内詩紋	@NJq4oEvg5gIcRpu
悠佳里	@yukari_rito

計46名

たくさんのご参加
ありがとうございます！

今号のうたそら

2025. May No. 26

参加歌人様 …… 46名

連作欄 …… 33名

テーマ詠欄 …… 35名

一首評 …… 3名

リレーコラム 望遠鏡 水上歌眠 さん

リレーエッセイ いちごいちえ 布野割歩 さん

ご寄稿いただきありがとうございました！

illustration: kohagi chihara

編集後記

真夏日かと思えばまたコートが欲しくなるような不安定な気候が続きますが、いかがお過ごしでしょうか。

わたしは前号の編集後記でご報告していた風邪に、結局三月いっぱい苦しめられました。そして今は花粉症に悩まされています。皆様もどうかお体に気をつけてお過ごしくださいね。

次号〆切は6月末、発行は7月頭です。テーマ詠のお題は「度」。少し難しいお題でしょうか。たくさんのご参加をお待ちしております！

編集鳥　千原こはぎ

ご感想はこちらまで！

Twitter（現X）ハッシュタグ

#うたそら

「うたそら」では Twitter（現X）でのご感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

短歌募集

くわしくはこちらから

2025. No. 27 〆切 '25 6/30（月）24時

8首の連作	テーマ詠「度」1首	一首評「そらよみ」

2025. No. 28 〆切 '25 8/31（日）24時

8首の連作	テーマ詠「冷」1首	一首評「そらよみ」

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください

http://kohagiuta.com/utasora/

連作欄 8首の連作 自由詠

#うたそう

Upside-down jellyfish

井倉りつ

続いてはペンネーム「まだ好きなのかわからない」さんからのおたより
焼け野原に緑うまれて今ここにあるものだけで暮らすと決める
おかしいな　君がいないと生きられない設定だったはずなんだけど
人の世界滅ぼしておいて片付けのおわったころに戻る英雄
使い方わかんないけど「のんこのしゃあ」っておまえのための言葉と思う
とくになにも言われないので赦された気になっているあまいエビマヨ
さてここで問題　あんなに苦しんで手放したのにいまごろなんで
「離れたくなかった」と「戻りたい」はちがう　水槽のサカサクラゲの失望

spark(l)ing

今紺しだ

花びらが土をゆっくり転がっていたのに急に飛ばされていく
水たまり踏む日もあるよ液体の水を有する惑星だから
泡たちはグラスの底で空を見た　誰から先に浮かぶだろうね
限りある人生だからできるだけ互いの邪魔をする約束を
ペルム紀を乗り越えてきた遺伝子が令和を越せるとは限らない
太陽になれなかったと称されて静かに空を渡る木星
生き延びて笑い合うことコイントス百連続で表みたいな
手をつなぐ　君が光れば僕が光る、それだけの細胞になろうよ

リレーエッセイ 26

いちごいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んで
それをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ　国道
書き手　布野割歩

公園に子どもが生えてそれはもちろんぼくたちの税金でまかなう

布野割歩

看板が好きだ。看板、とひとくちに言っても、看板にもいろいろあり、それぞれの看板にそれぞれの味があるわけだが、ここで言うわたしの好きな看板は、お店が宣伝で出してる看板とかではなく、道路標識とか、案内標識とか、国土交通省が税金で立ててる看板のことである。

わたしは鹿児島県出身で、鹿児島県は温泉がよく出る。子どものころ、祖母の家に行くときはいつもついでに温泉に入ってから、だったのだけれど、その待合室みたいなところには、道路講習の冊子みたいなのがなぜか置いてあって、母親の長風呂を待つ間、そこに載っていた道路標識の説明書きを延々と読んでいた。案内標識も好きだ。もともと数字が好きだったのもあるかもしれない、どこどこまで何キロ、みたいなのも、国道何号線とか県道何号線とか書いてあるのも、地名の下にローマ字表記があるのもよかった。嫌な要素がひとつもない。でね、そうなってくるとね、高速道路が最高なんですよ。高速道路って、お店が宣伝で出してる看板が少ないから標識に集中できるし、インターチェンジが一定の間隔で存在していてかつ移動量が多いから地名も数字もいっぱい見ることができる。カーナビもなんか高速道路仕様の画面になるじゃないですか、あれも好き、本当にテンションが上がる。川の名前が書いてある看板も良い。地元が田舎だったので二級河川しか見たことがなく、関西に引っ越してきて初めてあの看板に一級河川と書いているのを見て、妙に感動したのを覚えている。

標識の枕草子みたいな文章になってしまったが、じゃあなんでこんなにわたしは標識に惹かれているのか、という話になる。それはたぶん、最初の、「お店が宣伝で出してる看板ではなく」というところにヒントがある。お店が宣伝で出す看板は、それぞれに見せたいポイントがあり、それが個性となって惹かれるわけだが、国の看板には、それがない。個性がなく、日本全国で同じルールに従って情報が書かれている。日本全国の道に、国道として通し番号が降られて、日本全国の川に、その大きさで等級が割り振られて、同じフォントで同じ色でその情報が書かれて掲げられている、その整然とした感じが魅力的なのだと思う。この広い日本をひとつの文法で整理して表現する快感とでも言おうか、鹿児島の田舎に育ったわたしは、標識を見ることによって、わたしの世界の外側にも同じルールによって統べられた世界が存在していることを実感していたのだ。

大学生になって関西の方に引っ越してきて、東京にだって日帰りで行けるようになって、わたしにとって、わたしの世界の外側がすっかり小さくなってしまった。そろそろ車の免許を取ろうと思っているのだが、そうなるといよいよ、日本中が、わたしの手の届く世界になってしまうだろう。そうなってから見る標識もまた違う感慨があればいいなあ、と思いながら、まだ自動車学校に申し込みを出せずにいる。

屋上獏部26

宇祖田都子

踊り場に五月の犀の角が見えゆっくりと立つ四月の麒麟
屋上があると信じて三つある扉のうちの一つを開く
碧いねと言えば頷く横顔を影の扉が半分隠す
屋上に寝かせた獏を裏返す同じ獏なら重ねて消える
桃色のマシュマロそして虹色のマカロンそこへツートンの獏
屋上のコンクリートの亀裂から新入生のつむじでしょうか
教会の屋根を貫く十字架にきれいな臍がある獏の国
バクなどのうんちを捨てる滝つぼの無い滝または両性具有

南京（なんきょう）の野に立つワタシ

歌島孟

馬並めてみ狩立たすとおもうほど、車つらなる興福寺前
大仏の肌はぬばたま焼き討ちの闇に火花の咲くを見つめて
縦横にゆきかう衢（ちまた）、人波へ問うのは君が消えた経緯（ゆくたて）
早駒の近鉄線が難波津へ朱雀大路を横切ってゆく
宮柱太敷きませる跡ばかり今日も桜は咲くというのに
物部（もののふ）のいならぶ庭に百草が靡くを見れば夏が来ている
朝堂の庭へ遊びにいでよ児ら　失せしあまたの魂（たま）を鎮めて
春野焼く野火かと見えて、いにしえの奈良の都に満ちる夕焼け

公園

潤れ井戸

マロニエのぶつ切れの枝にも若葉古都のエアスポットの公園
電飾でキックボードの車軸から閃光がほとばしり嬌声
常勤をリタイヤ非常勤となり昼下がり見る豎子の懸垂
遠景に藤棚正面に蠖蠖（まくなぎ）　間（はざま）を鳩がぶるって歩く
円形のベンチぶらんこ滑り台不器用な人だけの王国
外周の躑躅に届く残照はスポットライト鳩も見ている
シダ類としゃぼん玉とが総括を複雑にする雀も集う
多国籍時代の古都で堅物の無神論者が骨を休める

Makeup

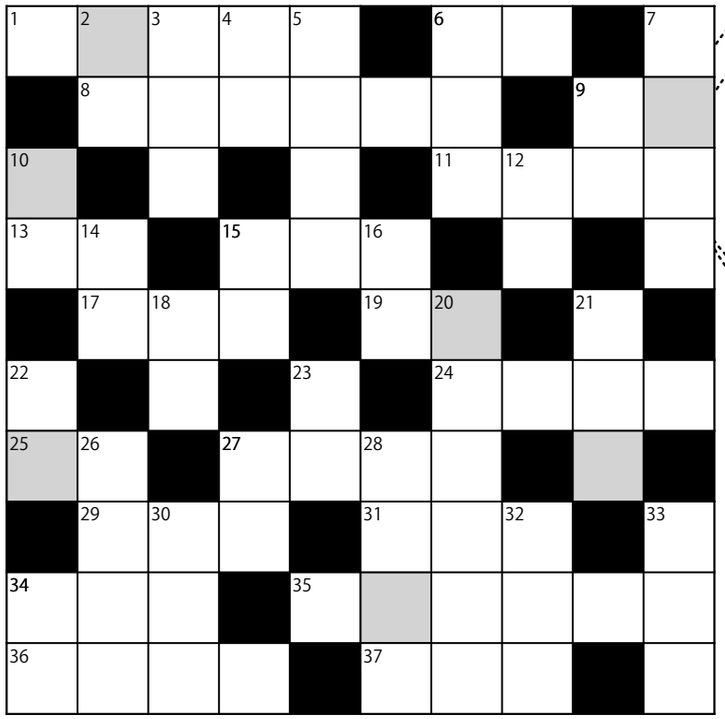
河岸景都

掌で水を押し込む　遠い日の乾きをいつか忘れますよう
指先で涙を足して頬からは滴り落ちる微かな祈り
グリーンの下地で隠すものがある私はずっと怒っているのに
ワントーン明るく笑うステージで奈落を覗く癖が抜けない
頼りない心を強く縁取ったアイラインには魔法が宿る
輝きを無駄にするまで欲しがった致死量のラメが目を焼いていた
誰よりも私でいたい　鏡台の香水瓶を割る日が来ると
正しさを叫ぶ準備が必要で唇と同じリップを塗った

ほっとひといき クロスワード

気軽に

色付きマスの文字を並べ替えてことばを作ってね



こたえ

ヨコのかぎ

1　使用する方法
6　めんどうを見ること
8　ラケットでシャトルを打ち合うスポーツ
9　めぐり逢ひて見しやそれともわかぬ間に雲がくれにし夜半の○○かな　／紫式部
11　惜しげもなくお金を使って派手に遊ぶこと
13　風水害を防ぐために川岸に土を積み上げて築いた堤
15　路傍に犬ながながと○○○しぬわれも真似しぬうらやましさに　／石川啄木
17　積んだ荷物
19　累、涙、婁
24　野球で走者が最初にふむベース
25　刺身の○○、話の○○、○○弾く
27　はかりごと。――を練る、――を立てる。
29　眠くて眠くてしかたがない気持ち
31　○○○でも我に頭を下げさせし人みな死ねといのりてしこと　／石川啄木
34　働くこと
35　「――戦士 セーラームーン」
36　最初に仕事を請け負った事業所
37　くろやぎさん「さっきの手紙のご○○○なぁに」

タテのかぎ

2　動物界最強。口も体も大きい。太くて重い。
3　場所を移し変えること
4　これと鉛筆があれば短歌は始められる
5　電気回路のショート。――的思考。
6　戦争が終わったあと
7　塩を出しすぎて海の底に沈んでしまったこれのせいで今でも海の水は塩辛いそうな
9　6月頃のじめじめした季節
10　旅人が泊まるところ
12　○○を詠む、短歌誌「○○そら」
14　元素記号Ｆｅ
15　親が同じで、先に生まれた男子
16　都会にはあちこちに立ち並んでいます
18　友が○○われよりえらく見ゆる日よ花を買ひ来て妻としたしむ　／石川啄木
20　学校などでクラスの代表者となる役職、リーダー
21　「角」の意味を持つ、金管楽器の一種
22　ひと憎むことほど易きことはなく○○の針ふる下を歩めり　／渡辺松男
23　一万の一万倍
26　何かの模倣をすること
27　○○は飲んでも飲まれるな
28　新たにきれいに書くこと。月詠を――する。
30　糖分が含まれていないこと
32　二つのことがほとんど時間に差がなく起こること
33　月曜のつぎ
34　ハロー夜。ハロー静かな○○柱。ハロー カップヌードルの海老。　／穂村弘

短歌リレーコラム 望遠鏡 26

短歌にまつわるあれこれについて
自由きままに書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

書き手 水上歌眠

テーマ 『詠まぬ』が花？

短歌は文字通り短く、作品世界のすべてを詳述することには向いていない。何かを詠むとき、私達は意識的あるいは無意識的に、省略すべきものを選択している。多くの場合において省略されるのは、例えば「あなたが手に林檎を持っているとして、もし手を離したらその林檎は落下しますよね」といったような、「わざわざそんなこと言わんでも伝わるでしょう」という部分になるが、この省略のフォーカスをあえてずらすと、作品に面白い効果が発生することがあるように思う。

寝ていても新宿まではたどり着くそこから先は歩けば動く

／上條翔『エモーショナルきりん大全』

連作『―ODQ編―』の一首で、ODQとは小田急電鉄を指す。新宿で電車を降りた後、徒歩でどこかへ移動しているはずなのだが、どこへ向かっているのかの情報が省略されている。このため先行きを見通せない不安感が発生し、『歩けば動く』という動作の重たさが増幅され、まるで抜けられない泥の中を、どこへ向かえばいいのか、どれだけ歩けばいいのかもわからないまま、ひたすら重たい体を引きずっているかのような感覚を覚える。情報をあえて落とすことが、作品に寄与している、と言えるだろう。

あなたなら誤って芽が出ないよう灼くだろう。僕は切り株に座った

／千種創一『千夜曳獏』

解説のために補うと（大変申し訳ない）、『あなたなら（切り株から）芽が出ないよう～』という事になるのだろうが、そうすると上句と下句に『切り株』が重複して登場することになる。このような場合、上句が説明不足になることを避けるため、下句側の『切り株』を省略するのがセオリーなのだろうが、この作品ではあえて上句側を省略しており、歌の途中まで何を焼いているのかが伏せられている。『焼く』を『灼く』と表記していることも相まって、何を焼いているのかわからないままに、ただ激しく燃え盛る炎のイメージがぽっかりと宙に浮かび、『あなた』の心には底の知れない苛烈な部分がある、ということが、読み手の心へ静かな衝撃を与える。

千種創一さんは優れた叙情の面で言及されることが多く、そこに異論を挟むつもりは毛頭ないが、それと同時に、読者の心理を巧みにコントロールする『技術』の人でもありますよね、と密かに考えている。

例に挙げた作品のように、『詠み込まない』ことにより効果を得る、というテクニックには非常に面白い魅力がある。中島敦の『名人伝』に、弓も矢も持たずして鳥を射落とす名人が出てくるが、これに似ていかにも妙技であり、達人の領域であると感じる。私もいつかこのテクニックを身に着けたいものだと思う。

アンドロメダ聴こえてる？

川瀬十萠子

滅びますと進化は告げて美しい所作で次々閉じられる傘
家族写真引き摺りながら泣かないで無人の都市よ無機の命よ
これは灰？（降り積もってゆく美しく）雪ではなくて？（雪ではなくて）
光年という距離想像し得なくてストロー同じ形に潰す
燃え進む炎はやがて辿り着く惑星最期の食事風景
なだれ込む光の水位　終わりって星の一生の事だったのよ
手を繋ぎ眠りましょうねひたひたと後は優しいディラックの海
アンドロメダ聴こえてる？彼方の姉よ滅びゆく双発の渦

ふがいないやいや

北谷雪

奇天烈なルームソックスばかり履きそういう民族として暮らした
ドライヤーの風浴びながらいくつかのバリエーションでおかえりと言う
ぎこちない調律のよう珍しくあなたがぽろぽろ零す弱音は
濡れている髪を気にしたもっともな理解者らしく頷くたびに
きみの敵らしき存在へあるだけの悪態をつくための語彙力
薬瓶のようにマーブルチョコを振る　これは不甲斐ない夜のイエロー
手の甲の月裏に似たさみしさにふたり健やかなクリームを塗る
まじないの「何はともあれ」を唱えたら五月の話をはじめましょうか

シグナル

橘高なつめ

春の夜はかわるがわるに鳴く猫の声にあわせて寝返りをうつ
濡れている裸足のように寂しさを残した夜のプールサイドに
セーターの編み目を通り抜けてゆく風は渇いたくち笛を吹く
枯れるから雨を飲もうと差し出した指から水のふるえに伝う
泣き虫な猫ちゃんどうぞ雨音の聴こえるやぶれかぶれの傘を
背もたれの角度を変える帰れない理由を雨のせいにしようか
もう他に行くあてもない地図を捨てどこへ向かうの四月の魚
もういない猫が残した傷いつか出会える時のシグナルみたい

一期一会

香子

気づかれぬようにあなたの元へ飛べ　たんぽぽ綿毛　春風そよぐ
「優しさ」と「聡明さ」とが同居する君が駆け行く春の階段
墨(すみ)薫る空気にふわり心まで軽やかとなる水曜の午後
皆照らす向日葵(ひまわり)だけど悲しみも知っている君まっすぐに咲け
内秘めた静かな炎と旋律を燃やし続けよ、奏で続けよ
「まだ翼残っているよ」この場所で新たな羽ばたき覚えればいい
疲れ果て迷う旅人荷を下ろし地図作れたり　君居たりこそ
鳥山の坂を登りしこの日々を過ごした友の道に光を

ごめんなさい

久保田毒虫

ありがとう全てのものに心から小学校のアオギリの木よ
ありがとう全てのものに心から人や犬猫毛虫でさえも
ありがとう全てのものに心から悲しみさえも泣いてるけれど
ありがとう全てのものに心から私は私だからどうした
ありがとう全てのものに心からポピュラーソングは閉まってしまえ
ありがとう全てのものに心から流行なんて閉まってしまえ
ありがとう全てのものに心からありがとうしか言えないけれど
ありがとう全てのものに心から貴方以外に誰がいるのさ

時は流れて

くろだたけし

新しく建った実家の玄関に子どもがひとりただ立つ写真
古すぎてもう使えない引き出しのマジック、お手拭き、木工ボンド
使わずに溜まっていったクリップや安全ピンよ呪わないでね
かがやきを失いさびたコンパスもとがったほうで刺したら刺さる
いつまでも続く助走が嫌になり跳ばないほうの人生にした
死のことを小さいころは知っていてやがて忘れてまた思いだす
保証する期間を終えた保証書の軽さ自由さ価値の無さなど
習慣で手を伸ばしたら死神が「眼鏡はなくて大丈夫です」

歓送迎会

桜さくら

送別の卓をかこみて感情をゆらゆら灯し春を越えゆく
還暦のあなたが退いてしまうから今年の花は春雨に散る
ちゃきちゃきの挨拶を聞く思い出と感謝を告げる三十年を
名物の餅餃子きて歓談の尽きぬわれらをひとときふさぐ
残る人来る人去る人それぞれの笑顔を映す集合写真
新しい人はかなりの早口でお子さんはもう大学生で
現役はいつまでなのか定年は六十五歳に延長されて
花の夜は通勤路さえざわめいて夢のつづきへ曲がってしまう

花の化石

鹿ヶ谷街庵

軽音の彼のギターを聴くたびに心臓に咲くガーベラがある
ドラえもん、内なるのび太にキスをして硬い体で抱きしめてくれ
ゴッホが絵を描き始めたのは二十六　俺はその頃から禿げてきた
何もかも母から孚んだ　あ、い、う、え、お、あいさつ、思春期、米の炊き方
川べりで犬が穴から掘りだした花の化石のようなオカリナ
眠そうな老犬を抱くまだきみは虹の橋まで行かなくていい
赤ちゃんがぽこんとお腹を蹴るときに地球の裏でゆれるたんぽぽ
滑走路だったのだろう僕たちを三年みていた桜並木は

一首評 そらよみ

前号の「うたそら」から
気になった一首をとりあげて
200文字くらいで語る
一首評のコーナーです

生きていてもいなくてもいい温かいような気
がするのが春だから

小泉夜雨

犬の死を扱った連作『駆ける、生きる』の最後の一首。犬の死に接し生じた、単なる憐憫に収まらない、死生観や無常観に、緩やかに縁取られたような一連と読んだ。木下龍也の「愛された犬は来世で風となり あなたの日々を何度も撫でる」がうっすらと想起されたが、これはその歌とは視点の異なる読後感への反作用としての思考がそうさせたのかもしれない。呟くような韻律も歌意とよく馴染んでいる。

一首評　西鎮

許されることであるなら校庭で飼い慣らし
たいティラノサウルス

薄荷。

恐竜が絶滅したのは、そういえばいつかの夕暮れ時だった。……と思うくらい、この連作に漂う気怠い時間と、ジュラ紀の荒野との親和性に驚く。校庭での飼育は、主体の指示ひとつで退屈な教室をめちゃくちゃにしてしまうから禁止。

一首評　北谷雪

コンビニもスーパーも人、　人の渦　列を
作った美しい列を

杜野詩季

おそらく東北大震災をテーマにした連作の五番目（散発的に本誌に掲載）。事実を、短歌的技術とファンタジー的表現も駆使して作品に昇華している。「人の渦」が「美しい列」となるまで、どれだけの労力が必要だったのか。「美しい」という、実感と皮肉が混ざり合った描写。文字列と読点等だけで表現する、その力量。「これは残しておくのだ」という意志を感じる。二つの一字空けが、言い表せないほどの時間と想いを伝える。

一首評　中村成志

ほっとひといき　気軽に クロスワード

前号の答え

こたえ

ソ	ツ	ギ	ョ	ウ	シ	キ

1 ヨ	■	2 ア	■	3 ジ	■	4 ア	■	5 ツ	6 マ
7 ハ	8 ク	シ	9 ユ	カ	10 ツ	サ	イ	■	ホ
■	ジ	■	キ	■	11 メ	イ	■	12 ゾ	ウ
13 パ	■	14 ワ	■	15 キ	■	16 チ	17 チ	■	ビ
18 パ	19 ラ	シ	20 ユ	ー	21 ト	■	22 ズ	23 カ	ン
■	24 ブ	ン	カ	■	25 サ	26 ギ	■	フ	■
27 ア	■	ト	■	28 フ	■	29 ジ	30 ハ	ン	31 キ
32 キ	33 ホ	ン	34 キ	ユ	35 ウ	■	ゴ	■	ソ
36 ナ	シ	■	ー	■	37 モ	モ	イ	38 ロ	■
イ	■	39 ゴ	ウ	ユ	ウ	■	40 タ	シ	ヤ

前号のクロスワードはいかがでしたか？
今号もどうかお楽しみいただけますように☆

大陸棚

西鎮

廃された母校の庭の葉桜の誰にも許さなかった裏切り
ごくまれにひとが立ってる岬だからちいさな町の喜望峰めく
ロシア式ルーレットっていうときのロシアみたいな野球部だった
この街の（メーデーメーデー）誰だかの救難信号みたいに躑躅
胸の奥に大陸棚をもっていてときどきひとりを選んだ、きみは
ガムテープ剥げば段ボールも剥げて晩生林檎のかおりに至る
ぼくじゃない誰かに向いた視線上を渚みたいに歩きたかった
花の名を教えてもらった坂道を自転車で駆けおりてく春だ

ぱぱっぱぱっぱ

寿司村マイク

背面を開いてポテトチップスを分けるぼくらのパジャマパーティー
灰色に白いラインのよく女子がパジャマにして履くショートパンツだ
泥酔の帰宅にいつも開襟のサテンパジャマに着替えてる父
子だぬきの腹巻き付きの夏パジャマ選ぶ西松屋に母だぬき
ジェラピケのフードに立った猫耳が気づいた惑星直列でした
パジャマから裸足のままで駅に着き栄光行きに乗る男の子
真夜中に替えるパジャマに染み込んだ寝汗ときみの見ていた夢と
ふり返る二階の隣も三着のパジャマが揺れるベランダがある

S（UNAYAMA）F 炎

砂山ふうり

夏だから仕方がないねおにぎりと会話している姉さんを見る
いたずらにピンポンタッチして逃げる逃げ足だけが光の彼方
こんなにも色あざやかに花開く花ことごとく盲目の星
人生の最初のキオク牙を剥くサルに追われてママを回った
かつおぶしをふりかけてもよろしかったでしょうかマダム　風と月夜に
よく見ると微妙に空の青違う全方位から狙撃されそう
また目覚め出すひとびとと会うためにおやすみ言えば光だす朝
王玉のいない将棋を指しているこの戦いは泥沼化する

私風景

たえなかすず

そのうちにいいことあるさ　鼻歌がいつもと違うきみは憂鬱
傍らにポップコーンを添えるから映画みたいに終えよう二人
ロッテリアに家族が揃う、笑顔あり。白光のなかそれは見事に。
この次はいつデートする？　三月（みつき）後はエモい期だからたぶん会えない
白菊ならいいのに握るスマートフォン趣きもなく光り続ける
頬に触れ脈に触れてもこいびとの凪がわたしに届くばかりで
投げ捨てた缶は弾んで転がって　いいな、これからどこでも行ける
瓶の底のぞけば決して雪解けをしないきみ似の甘い存在

テーマ詠「休」

休校の報せを聞いて焦るよりほっとするべき失格の母 ◆ 福山桃歌
わたしたち壁があるからそれぞれがひとりになれるゆっくりおやすみ ◆ 古井　朔
カレンダーあなたの休みに点がある事を知るのは私だけよね ◆ 真岡まな
ここまでいいと思って眠る日に目が冴えるなら独りでいたい ◆ まつさかゆう
仕事減り休み増えれば給与減るあたりまえ体操ジャッジャーン ◆ 御糸さち
女子校の出汁が効いてるあたしたちせーの！お昼間からごめんなさーい！ ◆ 南の島
駆け回る幼子といる子猫たちすこしはやめに眠る日々まで ◆ 水せ
一休みしない？と桜餅を買う彼は風流されどモテない ◆ 宮岡 りょう
本を吹く　埃を飛ばす　休暇とは言えない昼の一名となり ◆ 虫武一俊
休日は身体が休まるどころか却つて疲れるお祭りの中 ◆ 村田一広
約束が何もないから丁寧にごく丁寧にいれるコーヒー ◆ 森内詩紋

観覧車とバス停

多香子

君と乗るあの観覧車一夜には忘れるとても回る回るよ
麦の穂がつんつん伸びる十三夜わたしはひとり十六茶飲む
足りないと言ってしまえば足りないが私は平気あなたがいるから
バス停で幸せの隣りに哀しみが知らん顔して待ってるベンチ
嘘だって、人の心はすぐ変わる五月の空も晴ばかりじゃない
寝付かない夜に耳もと訪れるノイズ妖精の羽音ならいい
「大丈夫」わたしが呪文を唱えるからきっと明日のあなたは輝く
見上げれば私ひとりのためだけに紺色の空に上弦の月

ここにはいない

千原こはぎ

この人と見たいわけではないけれどさくらそれでもあふれる春だ
やわらかな花咲き誇るiPhoneに人の写真は一枚もない
定番のデートコースを次々と歩いて手すらつなぎたくない
違和感はひとつもなくて（触れたくもなくて）隣にいる（だけの）人
名店のランチの列に並びつつ知らない人だ五度目の背中
どうなっていきたいふたりなんだろう十円単位で割り勘をして
夜桜もお酒も風も心地良い　ここにはいないひとにあいたい
もう誰も好きになれずにさようならさくらそろそろ終わりにしよう

僕の昭和が

中村成志

鉄塔が一本立ってさがみ野の丹沢山塊蒼天に凍む
肘をつき寄り添っている　飲み干したホットミルクのマグの余熱に
紫陽花の枝にみどりの芽吹く朝あたたかいものだけを飲みたい
逆上がり濡れた鉄棒ぬれる腹ソメイヨシノが靄を吐き出す
ここだけが窪んでいると分からせるための昨夜の雨だね、靴よ
湯上がりの熱の退かない黄昏の汗のにおいはまだ冬であり
ワインドアップも今は見られず屋根のある球場なんて矛盾してるぜ
この僕の昭和が昔になったのはいつからだろうバスに日の丸

回文短歌で星間鉄道旅行

袴田朱夏

旅の額（がく）　今宵星間（星の間（ま））の資本改正予告が延びた
世の足しに火よりもっと光りあう愛しい意志という在（あ）り処（か）ひとつも旅費にしたのよ
西に乗る、至る、アルタイルの西に。乗る、至る、アルタイルの西に。
宵を吸う離職　いざこの手は記し果ての小細工よシリウスを射よ
クッキーに孤独なデネブ　子はノアの方舟でなくどこに行き着く
「傷んだらリゲルが夏に添う」と人。嘘につながるゲリラ団体
死後なのかピストルか火が遠く哭く音が光るとスピカの夏越
消える音　キスが紅差し（私が、ベガ。）慕わしさに（ベガ。）透きとおる駅

天使たちは眠っています昼下がり貝の呼吸で祈りを生んで　◆川瀬十萠子
休みたい僕はとにかく休みたい忘れることも忘れてるもの　◆久保田毒虫
AV女優の握手会行く夏休み　生ぬるいカルピス飲みながら　◆鹿ヶ谷街庵
たぶん母を休んだことのない母のネジ巻きとしてある独り言　◆西鎮
日曜はスタッカートでフェルマータ、ときどき休符はさんで猫と　◆たえなかすず
おふとんに映画にビール　きみの居ない三連休を迎え撃つため　◆千原こはぎ
彼も言ってた　弟子たちに　「なんとかなる」って　さぁ、一休み　◆天祐　実
ほら虹が（ねえ、どの虹が？）休んでるもこ雲と陽に挟まれて　◆中村成志
二時に呑みすやすやいつも眠る昼、胸も費やす休みの二時に　◆袴田朱夏
有休は有給休暇じゃあ無給休暇は無休なのおかしいよ　◆畑　依裕
プラスチックチェーン色あせ永遠に冬季休業中の温泉　◆薄荷。
大部屋に入院したる人たちにおやすみなさいがある二十二時　◆廣珍堂

真夜中はみんな迷子

薄荷。

時々は帰りたくなる君からの絵葉書でしか知らない景色に
行き先はまだ決まってはいないけど田舎に向かうバスを待ってる
うす紅に光るボタンに見送られあの子はバスをゆっくり降りる
歩行者用信号が青に変わるとき交差点には風がとどまる
地下鉄がゆっくり動きだす音を聞きながらそっと瞳を閉じる
さよならを言えないままになっている人が住んでる街に降り立つ
真夜中をスマホのライトで照らしてるぼくらは多分みんな迷子で
真夜中にひとり明るい自販機の割り切れないほど甘いカフェオレ

さくらばな

廣珍堂

肩口にさくらはなびらつけたまま転入届を提出したり
夜の闇につつまれ見事さくらばな艶なる音はいよよ降り来ぬ
まだ寒きあけぼのを待つさくらばなつぼみの先は鳥ひとつ呼ぶ
電停の新入生にさくらばなセーラー服と学ランを染む
紅淡きつぼみあらはるさくらばな弥勒菩薩の石仏のうへ
さくらばな眺めつつ聞く午後なれば古文の教師はゆるりとけゆく
手をつなぐふたりのうへのさくらばな脱ぎしコートの揺るを見てをり
木造の校舎を残す町に立つさくらばなへと生徒集へり

かえでのこども、小五の春

福山桃歌

すくすくと伸びた手足が美しく写真を撮った娘の寝姿
前髪が決まらないって泣きそうな朝それよりもはよパンを食え
重すぎるカバンを背負って春に見る夢は果てなく高みにあって
一点を乗せれば五人ごぼう抜き未来のための椅子取りゲーム
まだ親が知らないことはないはずのかわいいお口の奥に歯が萌え
眠れないからそばに来て、なんてまだ赤ちゃんでいたい夜もあるよな
きりきりと弓引くような一日がようやく終わる　朝はもうすぐ
何度でもわれの腹から生まれ出よ　離れるための伏線として

あなたにあげるわ

まつさかゆう

雨音も消え失せた夜、飲み込んだ錠剤の数だけ眠ろうか
ひび割れた唇をきみの香りで埋めてみたのに乾くばかりで
どうせまた瞼の裏で溺れるの もういないきみの背中を探して
夜明けに手懐けられた僕たちは抗いもせずにゆれる風見鶏
溶けたアイスキャンデーのハズレ棒 味がするうちにあなたにあげるわ
喧騒、吐き捨てるような「すみません」を掻い潜る。死ぬまでずっと。
何度でも透明な声で叫ぶからそばにいるようでいないけど好き
わたしたち終わった日から始まるの片道切符をくしゃくしゃにして

テーマ詠「休」

休憩を謳うラブホは共犯でアシスタントでたまに処刑場　◆麻数
人生の長期休暇と思いたい病の波に沈んだ日々を　◆麻倉ゆえ
こだまと鳥声見たこともない花影メメントモリで休息のち歩く　◆雨声
預金なら国に没収されるのに　どうにもならない休眠恋愛　◆井倉りつ
お休みの君に届けるプリントに桜の花をしのばせ歩く　◆宇井モナミ
飛行機の腹が笑っていて不吉だから一回休みのマス目　◆宇祖田都子
やらなくちゃいけないことを思い出す前に光って消える休日　◆泳二
休みたいいつか思い出に変わるような今を重ねて一眠りする　◆hs
鹿もまた頭を垂れてひとやすみ春日大社の木蔭に　◆歌島孟
育休を取るとあなたに聞いた午後の64対0の失恋　◆神洲橋
平日の休日はやけに晴れてて用もないのにスーパーに行く　◆涸れ井戸
人生が微かに増える音がする有給休暇の前の夜更かし　◆河岸景都

ふしぎなふしぎな

御糸さち

埼玉の人たちと会うときいつもいけふくろうの前で待ってた
階段をのぼる背中をいつまでもいけふくろうは石の瞳で
ゲーセンのあとはカラオケわたし以外だれも歌わぬ島谷ひとみ
デンモクは手から手から手へ渡されてフリータイムのバケツリレーだ
ＥＬＴ歌ったあとの朝焼けをともだちだらけで見た池袋
山手線半周乗ってたどり着く街だったから特別だった
池袋くわしくなってそこまでの街はひとつもわからないまま
ＹＯＡＳＯＢＩが懐メロになる朝の日にそれでも街は陰を抱えて

一枚の肌

南の島

盛り上がる縫合の痕なぞる指先までみんな一枚の肌
手は祈り胸は生き物足は風よろしく今日も驚かせてね
切れば失恋？伸ばせば結婚式？放っとけ二十六歳の髪
人間の六割は水人間の悩みも六割水に流そう
七歳の銅賞の絵は我と花蜜蜂みんな同じ大きさ
壊れるまで夢中で掻いた皮の下ひりひりしやすいわたし出てきた
好きという音は好きより強いから湿る小鼻に夏がまた来る
飛ぶことと別れることは同じこといつまでもいつまでも白い羽

春の罅

水せ

明るさをかためたポピーオレンジを砕く、終わりがくると知らずに
言葉より大切だってあるでしょう　言わないまま伝わらなかった
廃線の道を歩いてゆく蝶は飛びかたを忘れているようだ
永遠と永遠の境目にあるなんでもない日僕らは刻む
桜咲き菜の花を待つあわいにてここにいるから駆けておいでよ
ただいまと言わせてほしいだけなので使わない鍵まだ下げている
まだ夢を見ていたいだけ星明かり　明日までには終わらせるから
浮かんでく泡が歌ってくれるのであなたはいるよ、永遠になる

山形線　西へ

六厩めれう

念のためスノーブーツで来たわれに予報外れの雪はちらつく
過疎線のルールは多い先頭の扉以外はすべて開かず
乗務員三人乗せているけれどワンマンカーの看板でゆく
尻ばかり熱くなりゆく暖房は暖冬なれど手抜かりはなく
金沢のつぎは長崎　先頭に羽前が付けばお隣の駅
全員がスマホ見ていて絶景は地元民にはただの風景
外界の白さに気づき顔を上げスマホに勝った景色がそこに
駅員に手を振られればわたくしもツアーの客の一部となれり

マヨネーズに卵白は入れますか？

村田一広

生まれ落ちたる環境で暮らすのも定めなり砂漠の紫陽花
映画館に行つたつもりでポップコーン食べながら観てゐるユーチューブ
マヨネーズが統括をする混沌としてゐるサラダの野菜たち
ピラミッドのやうに積み上げられたのは落雁だらう朝の和菓子屋
前の客がお礼云つてる占ひが大当たりして恋が成就と
電話さつきから鳴り通し誰もゐない営業部から香るコーヒー
のろのろとホームに入る早朝の始発列車のテンションの低さ
（この子にも餌をあげてね）近所の野良猫が連れてくる子猫たち

散りてこそ

森内詩紋

急かすよな雷に少し気圧される「花冷えだね」とあなたは笑う
スタンプはゆっくりと押す　二人での春の記憶がずれないように
やわらかく揺れる桜にたとえれば、あなたは笑い視線をそらす
謀めいているのだ春雨に濡れつつ傘のおみくじ引けば
聞けぬことまた言えぬこと多々ありて花吹雪のなか歩く河岸
暮れるほど微熱を帯びてゆく桜川面はろろろろろと揺れて
八重桜昂りやまぬまま息を吸えばあまりに濃い夜の風
音もなく散る散る満ちる桜花　卯月の終わりにうたえグロリア

1970年から時を超えて

悠佳里

大阪の街を見守る黄金の仮面真っ青な空が眩しい
赤い壁がドクンドクンと脈を打つ　生の営みの体内にいる
てっぺんはクロマニヨン人その先にいるはずの我らホモサピエンス
アメーバがいる根本から伸びていく生命の樹はまだ伸びてゆく
いのちとは？生命とは？と考える　太陽の塔が考えろと言う
暗闇を内に秘めてる両腕は何かを求めて空へと伸びる
爆発で生じた力が時を超えて圧力となって私に迫る
計算され考え抜かれて作られたなんだかよくわからない高い塔